



エッセイ 同窓会とヒッグス粒子

JIMGA代表監事岩崎廣和

車窓からぼんやりと景色を眺めながら、45年前のことを思い出していた。高校入学後まもなくの頃のこと、隣町の中学校出身のK君と話した時のことだ。彼は数学がとても得意とのうわさで、なんとなく気になっていた。その彼が最初に発したのは、「岩崎君、光と同じ速さで走りながら隣を走る光を見るとどんなふうに見えると思う?」という問い合わせがあった。「なんだって? 光から光を見ると…? 光は止まっている? 止まっている光って…?」、「あ~、降参!」

数日後、AINシュタインの相対性理論のことだと知った。これから高校の数学・物理を学ぼうというときに、15歳で相対性理論とは…。東京など都会であれば、ハイレベルの情報交換が行われる場もあるだろうが、「ああ白雲の谷深く、都の塵(チリ)も通い来ぬ…」と校歌の歌詞にあるような、南信州の田舎にそんな場はない。今とは違って、パソコンもインターネットなどもちろんなく、情報源は新聞、雑誌、テレビ、ラジオ程度である。相対性理論を理解していた先生もいたかどうか。

もともと好きだった科学への興味をさらに深くしてくれたきっかけを作った、あの時のことを思い出させたのは、還暦を祝う高校の同窓会に向かう途上であったことと、科学雑誌Newton7月号で「素粒子の世界」を読んだばかりであったからだ。

Newtonは、「ヒッグス粒子の発見間近」を

伝えていた。ついにヒッグス博士が提唱した素粒子の質量獲得に関する仮説が証明される!

自然界最小の素粒子を知ることは、自然界最大の宇宙のはじまりを知ることになる。いわば己の尾を飲み込む“ウロボロスの蛇”的な感じでおもしろい。K君から相対性理論を知った時と同じわくわく感があった。

同窓会は卒業以来の顔もあって、ぎこちなく自己紹介から始まるところもあったが、まもなく打ち解け、高校時代の愛称で呼び合い、方言で語り合う大懇親会となった。



後列右から3人目が筆者

そして、驚いたことに、歌詞を見ないで校歌の大合唱ができた。歌詞は、「この山川のうちにこそ、誠の丈夫いざるなれ／操守は堅く意氣強く、世の風潮と戦いて／理想は高く知慮深く、精華を揚げん美をなさん」と続く。校歌に恥じない生き方をしてきただろうか?と自らに問いかながら…。

高校時代というのは身体も頭脳も心も大

躍進を遂げる時期だと思う。同窓生との語らいで、皆がその思い出を共有し拡大していく。酒も進み、それはバラしちゃあいけないだろう!という場面もあったが、今では全て良い思い出。語らいは深夜まで続いた。

そんな輪に加わりながら、残念ながら欠席したK君ならヒッグス粒子の発見間近について何を語るだろうか?と考えていた。

同窓会からおよそ三週後の7月4日、「ヒッグス粒子発見」のニュースが世界を駆け巡った。

Newtonの素粒子特集はまさにタイムリーナ企画で、科学の進歩を俯瞰できる人たちがいることを知らされた思いである。

普段は科学に縁遠いマスコミもトップニュースで扱い、解説もしばらく続いた。本屋ではいつもは目立たない棚にある素粒子や宇宙に関する本が平積みになっている。一杯飲み屋で昔の理科好きおじさんが宇宙を語っているのを見るのも楽しい。

「都の塵も通い来ぬ」我が故郷も、中央自動車道の開通などで交通の便は良くなり、コンビニや全国チェーンの店が多く出店するようになった。インターネットのおかげで情報の入手は瞬時にできる。

そして、いよいよリニア中央新幹線が開通するという。人も情報も塵もどんどん通い来る時代になる。

新たな時代の後輩たちは校歌をどんな気持ちで歌うのだろうか?時代に合わなくなつた歌詞を変えようということになってしまうのだろうか?



…都の塵も通い来ぬ…

喜寿を祝う同窓会はリニア開通の後となる。時代が大きく変わっていく中で、歳はとっても気持ちは高校時代に戻ってしまう仲間との楽しい語らいが目に浮かぶ。

心身のリフレッシュと言うが、私にとって同窓会は心のリフレッシュであり、科学の進歩に触れるのは頭のリフレッシュである。

K君に今度会う時には聞いてみよう、「ヒッグス粒子の発見で宇宙はどこまで解明されると思う? 真空って一体なんだと思う? 暗黒物質、ダークマターって? …」。

K君は今度も私の頭をリフレッシュしてくれると思う。